

兵庫県将来構想研究会 第8回会議 (2020. 6. 25) 要旨

【議題】 社会潮流 テーマ別検討③ (ポストコロナ社会のめざす姿)

(コロナ禍で「いずれ来るはずだった未来」が急に来た)

- ・ 全く新しい課題ではなく、以前から我々が突き付けられていた課題を加速・拡張させたのが、このコロナ禍だ。少し先だと思っていた問題に急に対応を迫られている状況と認識すべき。

(ベーシックインカム必要性)

- ・ 自動化・無人化が加速し、仕事のない人があふれる AI 失業社会になる可能性がある。AI に代替されないクリエイティブな能力の個人差は大きく、どうしてもベーシックインカム的な所得補償制度が必要になる。長い目で見てそういう仕組みを徐々に用意していく必要がある。

(労働法制の見直しが急務)

- ・ この機に社会を変えろという話が多いが、短期的には失業者、困窮者への対応が大きな課題。政府はベーシックな役割を徹底して果たしてほしい。特にフリーランスの保護政策が必要。
- ・ 日本は今でも「働かざる者食うべからず」で現金給付より、働いて稼いでもらうという意識。従って、エッセンシャルワーカーの視点に立った労働法制の整備を急ぐ必要がある。

(なくなる仕事・残る仕事・新しい仕事)

- ・ 機械化が進んで仕事がなくなると言われながら、労働時間はあまり減っていない。AI に仕事を奪われても、また新しいニーズが生まれ、新しい仕事生まれるのではないかと。人材の流動性を高める上でベーシックインカムは有効な手段だが、仕事が本当になくなるのかどうかは疑問。
- ・ 介護や看護のように人がやらないと難しい仕事は今後も残り、逆に賃金が上がっていくだろう。
- ・ 仕事なくなる話の一方で、残る仕事をどうシェアするかも重要な論点。人生 100 年時代を前提に、若者と高齢者の間でどう仕事をシェアするかも考える必要がある。

(社会全体が緩やかにフリーランス化していく)

- ・ 組織と個人の関係が希薄化し、個人がフリーな状況に向かう際に重要なのは、その人がどんな資本を持っているか。資本がなければ単に組織から切り離されるだけになる。会社が提供してきたお金やつながりを今後誰が提供するか。そこに地域の果たす役割があるのではないかと。

(何をして生きていくかが問われる時代に)

- ・ 人類史上初めて仕事なくなる時代が来るのではないかと。農耕社会になって以降、働き続けてきた人間だが、遂にそれが終わるかもしれない。人間は何をして生きていくのか、人間は何のために生きているのかが再び問われる時代になるだろう。
- ・ 労働時間が更に減っていくはずで、仕事以外に何をして過ごすかが大問題になるのは確実。
- ・ 巣ごもりの中で、自分の魂が喜ぶことは何かを考えた人は多いと思う。密を避けることを基本にしつつ、芸術、自然など精神的な価値をより大切にする社会になっていくのではないかと。
- ・ 本質的なワークライフバランスを考える時代になっていく。副業も含めて様々な働き方をする人が増えるようになれば、食べるために必要な給与を得るための労働だけではなく、自分自身を見つめ直す、自分の価値を見出すといった労働も増えていくのではないかと。
- ・ 一見無駄に見えるものが実は社会の活力源になっているという視点も大切だ。

(今こそ連帯を)

- ・ 外国人と日常的に接触している人は排他的行動を取りにくいとされる。立場の違う人との交流が寸断されることで、異質なもの、異なる考え方を排除する風潮が強まらないか心配だ。
- ・ 日本は社会的な連帯が弱い国と言われており、コロナ禍で、元々孤立していた人が更に孤立する可能性がある。物理的な密を避けつつ、つながりの密をどう保つか。リスクに強い社会を作るためにも、住民の連帯、助け合って生きるという意味での共同体の再構築が必要だ。

(限界費用ゼロ社会)

- ・ AI やシェアリングエコノミーの飛躍的發展により次第に「限界費用ゼロ社会」に近づく。「低欲望」化していることもあり、限界費用ゼロで収入は減っても生活はしていけるだろう。
- ・ 限界費用ゼロ社会は、エネルギー費用ゼロ社会でもある。再生可能エネルギーを活用し、電気代の無料化を進めるべき。エネルギーコストゼロのエコハウスなども考えていく必要がある。

(教育のあり様を根本から変える必要)

- ・ AI は脅威だが、逆に考えればやることはシンプルで、相手が不得意なところを徹底的に鍛えること、つまり教育が重要。創造力や心の資本を持ち合わせた人材をいかにして増やすかが課題。
- ・ まずは学校をブロードバンド化し、教科書をタブレット化し、授業のあり方を変えないといけない。ベーシックインカムは必要だが、成長戦略として教育への投資は最も重要だ。

(安全安心の先にある相互監視社会)

- ・ 働き方も住まいも、ずっと一か所にいるという社会ではなくなっていくと、おそらく人にタグをつけ出すだろう。知っている人は安全だが、知らない人は安全ではないということになって、情報をその人に付けていくしかなくなっていくのではないか。

(これから求められる地域の姿)

- ・ 田園都市論は、都会の人が農村に理想郷を作るような議論になりがちだが、大事な今はある都市をどう変えるか。集積がイノベーションの源泉といった話の一方で、密を減らす視点から、都市内にオープンスペースや自然との共生空間をどう埋め込んでいくかという話をすべきだ。
- ・ リアルで会うことの価値が問われる時代になるので、その部分で地域の特色を出すべき。

(元に戻すのか次に進むのか)

- ・ 某社は、全員出社に戻すが、不要不急の会議は激減させるという。対面で会うことの価値を考え直し、線引きを変えるということで、これは次のステップに行こうとする動きだ。
- ・ 自治会も、参加はするけど会議はリモートで十分と考える人が増えるはず。戻そうとする動きもあると思うが、次へ行けば若者が入ってきてくれると前向きに考えることが大事。
- ・ そこに集まるのがコミュニティだったが、バーチャル化が進むと、そこに住んでない人も紐づけられて、一緒に何かやっていくこともできる。むしろそれを後押しするぐらいでよい。

(鍵は希望)

- ・ 若者に希望があるかを尋ねたら、日本は約 6 割と最低。欧米諸国、韓国と比べて非常に低い。一方、東日本大震災の被災者では、ダメージを受けた人の方が希望を持つ割合が高く、その人たちは何か行動を起こしている人だという。鍵は「希望」ではないか。

(以上)